慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若手研究成果報告会
Sub Title	Annual meeting for oral presetation of young researchers
Author	増田, 早哉子(Masuda, Sayako) 皆川, 泰代(Minagawa, Yasuyo)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	活動報告書 Vol.4, (2010.) ,p.33- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20110300-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

14 若手研究成果報告会
Annual Meeting for Oral Presentation of Young Researchers

開催日　2011年2月8－9日
企　画　全体
講演者　伊澤栄一、四本裕子、染谷芳明、田谷文彦、増田早哉子、山崎由美子、加藤真樹、一方井裕子、柴田みどり、寺澤悠理、丹野貴行、八賀洋介、石川哲朗（脳と進化班）、皆川泰代、太田真理子（遺伝と発達班）、尾島司郎、桃生朋子、佐治伸郎（言語と認知班）、モハーチ・ゲルゲイ、三宅博子、山根千明、濱雄亮、秋吉亮太、鈴木生郎、鈴木康則（哲学・文化人類学班）、村井忠康、植村玄輝、矢口朱美（論理・情報班）

毎年、年度末に行われる若手研究成果報告会が2011年2月8、9日の二日にわたって東館G－SECにて行われた。第3回目となる今回の報告会では、特別研究教員が30分枠、非常勤研究員が20分枠で最新成果の口頭発表そして質疑、討論を行った。

まず初日の午前中には、遺伝と発達班から2名、言語と認知班から3名の報告が行われた。遺伝と発達班からはGCOE－CARLS施設で行う乳児の脳機能および行動学的研究、慶應大学病院小児科との新生児についての共同研究、CARLSと提携のあるフランスENSとの共同研究、大脳皮質活動と循環器活動の因果関係を検討したNIRS-EEG（脳波計）同時計測研究の成果等が報告された。言語と認知班は第二言語を学ぶことが母国語能力へ与える影響についての脳科学的研究、第二言語を獲得する際の普遍文法（UG）の役割についての実験的検討、オノマトペの音象徴性についての対照言語研究についての報告がなされた。外国語習得という身近なトピックについて素朴な疑問から専門的なことまで熱心な討論がなされた。午後の部では、まず論理・情報班の3名より「事実は知覚されうるか」「志向性の対象説」といったテーマについての発表に加え、心理学者Sullyの「心ある機械」としての主体概念の形成についてフロイトの概念と対照化させながらの考察がなされた。引き続き、脳と進化班より7名の発表が行われた。まずはCARLSのマーモセット・ラボそしてつくばカラス生態研究施設から得られた成果が報告された。カラスが社会的順位性を形成するという知見に加え、羽づくろいは優位性の高い個体が低い個体へ優位性誇示のために行うといった極めて興味深い結果が報告された。この他にもfMRIを用いた表情表出やアハ体験についての脳機能研究等が報告された。5つの班から構成される本拠点ならではの分野を超えた質問が飛び交い、執筆者も普段使わない新規の脳内回路（？）を開拓したような1日であった。

二日目は午後から脳と進化班6名および哲学・人類学班7名による報告会が行われた。前半は、脳と進化班による報告からはじまった。5名がMRIを用いた神経科学研究に基づく報告を行った。知覚学習を用いた脳の可塑性モデルの提示にはじまり、探索的意思決定や間接発話理解といった高次脳機能研究や、身体内部の知覚過程と個人特性との関わりの認知神経科学研究に加え、脊髄解剖画像撮像技法の開発まで、MRIを使用した多岐にわたる研究が報告された。また、同じく脳と進化班から学習理論に関する種を超えた比較が行われた。それぞれの研究に対して、技術的な側面から今後の研究の発展方向に関してまで討論が交わされた。

後半は哲学・文化人類学班からの7名が報告を行った。医療人類学の立場からは、3名が、糖尿病患者を対象とした理想の患者像の分析や、同じく糖尿病医療現場における身体技法を用いた学習過程についての考察、また音楽療法における即興という新たな試みについて報告した。身近な問題でありながら、実態を伺うことが困難な医療現場について、専門家からも他分野からも活発な質問があがっていた。また美学の立場からは、絵画印象における違和感について実験美学的研究報告を行い、これにも知覚心理学など領域を超えた立場からも意見が交わされた。哲学の立場からは3名が報告を行った。従来証明において用いられていた順序数を用いない、新たな証明技法の開発、三次元主義と四次元主義を定式化する試みの提案、デリダによる動物論の考察が行われた。

2日間にわたり28名の報告が行われた。「論理と感性」という枠組みはあるものの、報告内容は非常に多岐にわたるものであり、この多様性が本拠点を特徴づけている点のひとつと言える。多くの活発な討論が交わされたが、本会の場のみでなく、今後も他分野との交流により研究の発展が望まれる。来年度は拠点の最終年度である。それぞれの研究の集大成が期待される。

（増田早哉子・皆川泰代）

The third annual meeting for oral presentation of young researchers was held in G-SEC Lab in East building, Mita campus, Keio University (Date: February 8th-9th, 2011). In this meeting, young researchers including associate professors, assistant professors and researchers in CARLS reported their recent activities and study results. This was a very precious occasion as researchers from different fields involving neuroscience, genetics, psychology, philosophy, linguistics, anthropology and logics gather together and discuss each topic in an interdisciplinary fashion. The two-day session demonstrated that a wide variety of researches to clarify the human activities are under investigation in CARLS in the light of 'logic' and 'sensibility'.